

原著論文

地方開催型芸術祭における時限的な言語景観の比較研究

—豊岡演劇祭への応用展開に向けて—

野津直樹 姚瑤 河村竜也 傅建良 高橋伸佳

A Comparative Study on Temporary Linguistic Landscapes in Local Art Festivals: Toward Application to the Toyooka Theater Festival

NOZU Naoki YAO Yao KAWAMURA Tatsuya FU Kenryo TAKAHASHI Nobuyoshi

Abstract

The annual event of the Toyooka Theater Festival, which takes place in September in the Tajima region of Hyogo Prefecture, is expected to promote sightseeing tours by providing the festival participants with appropriate information on travel within the festival area. Based on a close examination of similar art festivals held in a wide area of a given region, such as the Setouchi International Art Festival and the Echigo-Tsumari Art Triennale, this study conducts a comparative analysis of the linguistic landscape in multiple languages at both festivals and proposes a language plan for the linguistic landscape to enhance the tourism ripple effect of the Toyooka Theater Festival.

Key words: Temporary linguistic landscape, art festival, Toyooka Theater Festival, foreign tourists, sustainable tourism, multi-cultural society

(2023年3月13日受付, 2023年7月5日受理, 2023年9月30日発行)

はじめに

2020年以降、例年9月に兵庫県但馬地域の広域で多様な舞台芸術公演が催される「豊岡演劇祭」は、兵庫県豊岡市が文化観光推進法に基づき策定した地域計画の中で、「豊岡市内の文化資源と演劇を掛け合わせた新しいツーリズムの可能性を予見するものであり、演劇祭をきっかけに様々な実証実験を行うことで地域活性化のプラットフォームとなり、文化観光推進の新しいエンジンになるもの」として位置付けられており、「5年でアジアNo.1、10年で世界有数の演劇祭となること」を目標としている。2022年9月に開催された「豊岡演劇祭2022」では、総面積約700平方キロメートルという広大な豊岡市域全体および隣接する兵庫県養父市・香美町の

一部において同時多発的に演劇的な舞台芸術パフォーマンスが催され、のべ1万人を上回る参加者が集う日本最大級の演劇祭となった。

豊岡演劇祭のような地方開催型の芸術祭は、シアターコモンズ(東京都)、横浜国際舞台芸術ミーティング(横浜市)、京都国際舞台芸術祭(京都市)を例とする演劇を扱う都市型の芸術祭と比較すると開催エリアが広域にまたがる特徴がある。その理由の一つとして、地方開催型の芸術祭では開催主体となる地方自治体が、地域外から芸術祭を目的に訪れる観光客の周遊による経済効果に期待していることが挙げられるだろう。そのため、舞台芸術作品自体の情報やその開催エリアに関する観光情報、あるいは複数の開催エリア間の移動に関する適切な交通情報の提供を推進することによって、芸術祭

参加者の観光周遊活動を促進し、参加満足度を高められる可能性がある。

また、豊岡演劇祭の場合は、2022年度までは新型コロナウイルス感染症拡大の影響を受けて日本国内からの参加者が殆どを占めたものの、2023年度以降は徐々に訪日外国人観光客の参加を受け入れてさらなる発展を遂げることが期待されている。国際芸術祭のような文化観光行事では、開催地とは異なる文化背景を持つ海外からの観光客が、参加作品の芸術的価値や、開催地周辺の観光資源の価値への理解を深められるようにすることによって、開催地域の観光地としての国際的なブランド価値が高まることも期待され得る。しかし、現状の豊岡演劇祭では、舞台芸術作品自体や、複数の舞台芸術作品間を回遊するための交通案内の多言語対応が殆ど進んでいないという課題がある。そのため、今後、豊岡演劇祭を地域計画に記されたとおり世界有数の演劇祭に発展させ、兵庫県豊岡市が文化観光都市としての魅力を高めていく上で、多言語あるいは多文化視点での情報提供の不足がその障壁となることが考えられる。

芸術祭では以上のような情報提供を目的として、開催地内に常時設置されている言語景観に加え、時限的な言語景観が追加で設置されるのが一般的である。しかし、どのような言語景観を設置することが周遊促進や満足度向上に寄与しているかは必ずしも明らかではない。

そこで、本研究では、特に地方開催型の芸術祭としての先行事例である大地の芸術祭と瀬戸内国際芸術祭を研究対象として現地調査を行い、多様な言語景観の事例を収集し、合理的な分類を試行することによって、豊岡演劇祭を含む今後の地方開催型の芸術祭において時限的な言語景観を設置することによる効果測定指標を検討するための理論的な枠組みを構築することを目的とする。

1 言語景観に関する先行研究の整理

本研究に取り組むにあたって、はじめに関連する先行研究を整理した。観光客に対して観光に必要

な情報を適切に提供するための方法論を研究する分野として、言語景観 (Linguistic Landscape) 研究が挙げられる。言語景観とは、看板・標識・掲示物等の公共空間における文字言語の活動を指し、近年、活発に研究が進んでいる分野の一つである。

まず、2010年ごろまでの国内外の先行研究を整理しよう。初期の代表的な言語景観研究としては、正井 (1972) が挙げられる。正井は地理学者でありながら言語の要素にも注目し、言語景観を「言語及びその視覚表現である文字から見た都市景観」と定義した (正井, 1972, p.153)。Landry & Bourhis (1997) は、言語景観の特徴について、「特定の領域あるいは地域の公共的・商業的表示における言語の可視性 (Visibility) と顕著性 (Salience)」だとした (Landry & Bourhis, 1997, p.25)。その後、バックハウス (2005) は、「受信者」である市民や観光客らへの情報提示の目的を念頭に置いて、言語景観を「道路標識、広告看板、地名表示、店名表示、官庁の標識等に含まれる可視的な言語の総体」としている (バックハウス, 2005, p.53)。また、「発信者」、「受信者」及び「目的」の多様化に伴い、多言語および多文化を強く意識した言語景観の定義としては、金 (2007) の「公共空間における視覚的な言語コミュニケーション」 (金, 2007, p.3) がある。

さらに近年の日本国内における言語景観研究は、「受信者」や「目的」の多様化による研究対象の多様化が顕著に現れてきた。近年の言語景観研究の代表的なものとしては、庄司・バックハウス・クルマス編 (2009)、中井・ロング編 (2011)、本田・岩田・倉林 (2017)、李編 (2019) 等が挙げられる。その研究対象も、多文化コミュニティや国際的な文化観光の観点のみならず、本稿が取り扱っている地方開催型芸術祭の観点に直結している多言語景観 (庄司 2009、井上 2009 等)、外国人集住地域の言語景観 (寺尾 2009、山下 2010、ロング・今村 2012、斎藤 2015、斎藤・志喜屋 2015、ロング・斎藤 2018 等)、方言景観 (斎藤 2016、ロング・斎藤 2016、2017 等)、言語景観の日本語教育への応用 (磯野 2019、甲賀 2019、ロング 2019 等) と多様化しつつある。このように、言語景観は都市景観の重

要な要素として、これまで都市計画学、地理学、社会言語学、言語学等様々な分野で盛んに研究されてきたことに加え、地方開催型芸術祭・演劇祭及び訪日外国人観光客や国内旅行者等と関連づける形で新たな研究領域として注目され始めている。

しかし、観光場面に焦点を当てた言語景観研究や、言語景観の目的（発信者視点）と役割（受信者視点）について分析した研究は未だかなり限定的である。特に演劇祭や芸術祭のような文化行事における時限的な言語景観を、言語景観の受信者である市民・観光客・文化行事の参加者の満足度や欲求等の視点から、常設的な言語景観を比較対象とした研究は十分とはいえない。ロング・斎藤（2022）は「異国情緒」という非日常空間を演出しているテーマパークの言語景観に注目しているが、テーマパークはほぼ常設的な空間であり、演劇祭等を含めた芸術祭における時限的な言語景観に関する先行研究は管見の限り存在せず、文化観光で求められるより複雑な観光情報を、言語景観を整備することで言語的・文化的に多様なバックグラウンドを持つ観光客に示していくことの重要性に着目した研究も未だ見られない。

2 地方開催型芸術祭における時限的な言語景観に着目する意義

2020年以降、新型コロナウイルス感染症の拡大をきっかけに訪日外国人観光客は激減した。今後、日本が再び観光立国として多くの訪日外国人観光客の受入を目指す過程では、文化観光の推進が有効だと考えられる。一方で、訪日外国人観光客の日本の歴史や伝統等を踏まえた文化に対する知的好奇心を充足するために必要な観光情報の提供は、従来の観光地において必要とされてきた観光情報と比較しても複雑で、かつ正確さとわかりやすさも重視されるが、それらは未だ十分に整備されているとはいえない。特に、芸術祭や演劇祭のような国際文化行事における時限的な言語景観は、常設的な言語景観と比較しても多言語での整備が進んでおらず、外国人観光客が主体的に得ようとする情報の範囲が広く複雑なため、より課題が大きいと考え

られる。文化観光については、渡部（2021）が文化観光推進法を観光学と法学の学際的な見地から分析する等の研究が進んでいるが、文化観光研究と言語景観研究との間には未だリサーチ・ギャップが存在し、両者の架橋に研究意義がある。

また、本研究が特に地方開催型の芸術祭を研究対象に選定している理由として、1970年代以降にモータリゼーションが進んだ日本社会の特に地方部において、自動車運転者以外の移動の課題が年々大きくなっており、訪日外国人観光客が日本国内の地方部を周遊する際の障壁となっていることも挙げられる。Urry（2007=2015）は、現代社会における多様な移動のあり方を整理しつつ、モビリティの欠如によるサービスからの一部の人々の排除や、アクセスの不平等性を指摘した。また、モータリゼーションによる日本国内における自動車の普及と、少子高齢化および人口減少による社会環境の変化については、野村（2019）が社会学的な見地から詳細に整理している。野村（2019）は現状を整理した後に、住民の福祉の観点から地域モビリティの担い手（アクター）の多様化を分析したが、自動車依存が進む過疎地域のモビリティを確保するための抜本的な解決策は未だ見出だせていないのが現状である。切通ら（2021）は、人口減少や高齢化の進行を食い止めるためには、若年層の定住促進が根本的な解決策であることを指摘しつつ、現実的にはその実現は極めて難しく、地方ではまずは観光に訪れる「交流人口」を拡大すべく観光促進することが地方の人口動態に対する処方箋でもあり、地域の産業振興の切り札に位置づけられていると論じている。また、清水（2021）は、訪日外国人の増加をはじめとした国内の観光客受入環境変化によって、二次交通体系整備が地域観光地の受入環境整備の主要課題に位置づけられるようになったと論じている。

兵庫県他（2022、p.13）によると、人口約7万7千人（豊岡市、2023）の豊岡市においても自家用車での移動が平日7割、休日8割であり、公共交通の分担率は低いとされている。公共交通分担率は平日・休日ともに鉄道が1%、バスが2%で、合計し

でもわずか3%であることもあって、公共交通の利便性は高くない。これらは2010年の近畿圏パーソントリップ調査を出典としているためデータとしては少々古いが、直近の13年間で上述の自家用車への依存率が大きく改善されたとは考えにくい。このことは豊岡演劇祭参加者の会場間の移動利便性にも影響している。豊岡演劇祭実行委員会(2022、p.49)によれば、演劇祭参加者に対して実施したアンケート調査の結果、「会場間の移動はスムーズだったか」との設問への回答が利用する交通機関によって大きく異なることが分かっている(図1)。具体的には、公共交通機関等を利用して移動した参加者の会場間移動のスムーズさに対する肯定的な回答の割合が、自家用車等を利用して移動した参加者と比べて大幅に低い。このことから、会場間の移動の不便さへの不満が、演劇祭参加者のエリア間周遊促進の障壁になっている可能性があると考えられる。

一方、遠山ら(2003)は、日本の劇場での芸術鑑賞に関して、9割以上の鑑賞者は何らかの形で鑑賞後の「余韻」を楽しみたいと感じており、演劇の楽しみをより盛り上げるためにも、劇場そのものだけでなく、鑑賞前後の行動まで考慮した「鑑賞環境」をしっかりとデザインする必要があると主張してい

る。さらに、中村ら(2022)は、東京・ニューヨーク・ロンドンの三都市でアンケート調査を実施し、回答結果の回帰分析から、娯楽活動の頻度以上に、娯楽活動場所への交通手段が便利であると感じられることの方が、住民の幸福度に大きな影響を与えているとした。重要なことは、この調査で計測しているのが「主観的アクセシビリティ」であるという点である。物理的なアクセシビリティと違って、主観的なアクセシビリティは、インフラ自体を拡張したり高性能化したりしなくても、例えば交通手段を利用するのに必要な情報をわかりやすく住民に届けることができれば、そのことによってコンサート会場等への「主観的な行きやすさ」が改善することもあり得る、としている。但し、中村ら(2022)の研究は国内外の大都市を主な対象としており、交通分担率が自家用車に集中する地方部の過疎地域における分析や提案は見られない。本研究にあたっては、地方部における芸術鑑賞こそ、都市部と比べても主催者側がこれらの「余韻」を主体的にデザインする必要性が大きいのではないかと考えた。また、地方開催型の芸術祭であれば、通年で行われる観光活動と比較しても、観光客から通常ネガティブに判断されやすい移動時間の制約をポジティブな価値に転じるきっかけを作りやすいと考え、観光客

【会場間の移動はスムーズだったか】

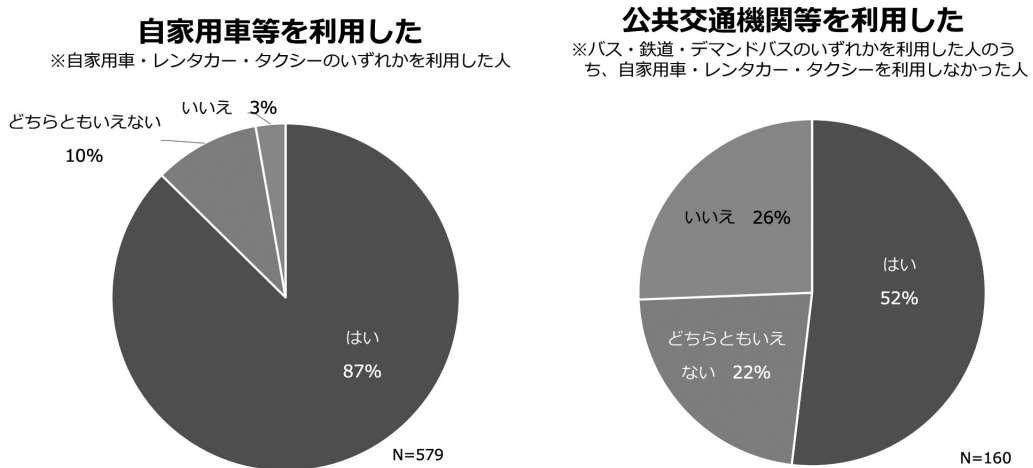


図1 移動手段と移動の困難さ (豊岡演劇祭実行委員会、2022、p.49より図表引用)

の移動に着目しながら多言語・多文化を前提とした言語景観のあり方を研究し、実践的なデザインと整備を進めていくための研究対象として着目することとした。

3 本研究の調査・分析方法

本研究では、2022年に香川県で開催された「瀬戸内国際芸術祭2022」（以下、「瀬戸芸」）および同年に新潟県で開催された「越後妻有大地の芸術祭2022」（以下、「大地の芸術祭」）を対象とし、著者らが現地を訪問して観光客として2つの芸術祭に参加しながら現地で見つけることができた言語景観を収集し、分類するという参与観察によって調査を実施した。

著者のうち、姚（2022年10月29日～30日の2日間）が瀬戸芸に参加し、野津（2022年10月31日の1日間）および河村（2022年11月3日～4日の2日間）が大地の芸術祭に参加した。本稿の以下に掲載する両芸術祭の言語景観を記録した写真は、すべて著者のいずれかが現地で撮影したものである。

観光客としての参与観察という調査の特性上、広大な芸術祭の開催地域内に設置されたすべての言語景観を網羅的に収集しているわけではないというデータの制約があるため、言語景観の設置数や頻度を基にした分析は本研究の対象外である。一方で、前述した「多様な言語景観の事例を収集し、合理的な分類を試行することによって、豊岡演劇祭を含む今後の地方開催型の芸術祭において時限的な言語景観を設置することによる効果測定指標を検討するための理論的な枠組みを構築する」という目的のためには、本調査で著者らが収集した限りの言語景観の特徴を分析して合理的な分類方法を検討することには、十分な研究意義があると考えた。

4 調査・分析結果 ―言語景観の試行的な分類

現地で収集した言語景観を一次的に分類するにあたり、まずは、橋内（2019）が以下のようにまとめている一般的なサインの分類を援用することとした。

サイン：何らかの情報をその場にいる人に伝達するために文字化・記号化したもの。

「商業サイン」と「公共サイン」とに分けられる。

商業サイン：私企業が営利目的のために掲げたもの。

公共サイン：公的な組織・機関が市民の生活行動に役立つように付けたもの。

国土交通省は「誘導」「位置」「規制」「案内」の4種類に分類している。

誘導サイン：施設・設備等の方向を指示するためのもの。

位置サイン：施設・設備等のある位置を告知するためのもの。

規制サイン：利用者の行動を規制・禁止するためのもの。

案内サイン：乗降条件や位置関係を案内するためのもの。

芸術祭の言語景観のうち、参加者を受信者として何らかの情報伝達を目的としたものはサインの一部であると考えられるが、本研究の対象となる演劇祭を含む芸術祭は、いずれも私企業が営利目的のために実施する文化行事ではないため、どちらかといえば公共サインの性質が強いといえる。そのため、まずは国土交通省の「誘導サイン」「位置サイン」「規制サイン」「案内サイン」のいずれかに当てはまる言語景観を分類し、いずれにも当てはまらないものを「その他の言語景観」とした。

「誘導」「位置」「規制」「案内」の4種のサインは、一般的に交通案内上必要とされ、時限的のみならず常設的な言語景観となっているものも多いと予想されたため、時限的な言語景観と常設的な言語景観を比較することにより、芸術祭の運営上必要となるサインの示唆が得られる可能性があると考えた。また、「その他の言語景観」は交通案内上は必要ないと考えられることから、用途を分析することによって、やはり芸術祭の現場で必要となるサイン

の特徴について示唆が得られるのではないかと考えた。

4.1 芸術祭における「誘導サイン」の例

図2～図4に瀬戸芸の誘導サインの例を、図5～図7に大地の芸術祭の誘導サインの例を示す。目に付くのは統一された色使いで、瀬戸芸のサインは青、大地の芸術祭のサインは黄色が基調となっている。瀬戸芸の青は、道路交通標識の「指示」「案内」を示す色とも共通しているが、大地の芸術祭の場合、誘導サインであっても道路交通標識では「注意」に使われる黄色が優先されている。これらの色はいずれも芸術祭全体のシンボルカラーと共通しており、常設的な言語景観に加えて追加で設置さ

れる時限的な言語景観であるからこそ、他の言語景観と色を統一する優先順位を上げることによって、その芸術祭に関連する情報であることの視認性を上げようとしていることが推察される。

日本語以外の言語表示状況は、網羅的な調査はできていないものの、本調査中に収集することができた瀬戸芸における時限的な誘導サインにはいずれも英語が併記されていたのに対し、大地の芸術祭では文字や一部の説明書きが日本語表記のみとなる誘導サインが複数見られた。

言語景観の多言語対応状況について考察する前提として、訪日外国人旅行者が訪問・利用する観光施設、道路、公共交通機関等における言語景観の多言語対応に関する日本政府のガイドラインを参



(左から順に) 図2・図3・図4 瀬戸内国際芸術祭における時限的な誘導サインの例
(撮影者：図2・図3・図4ともに姚)



(左から順に) 図5・図6・図7 大地の芸術祭における時限的な誘導サインの例
(撮影者：図5は河村、図6および図7は野津)

照する。観光庁は2014年に「観光立国実現に向けた多言語対応の改善・強化のためのガイドライン」(以下、「ガイドライン」)を策定し、

- (1) 多言語対応を行う対象・範囲等
- (2) 多言語での表記方法
- (3) 解説文章への対応 (外国人向けの補足)
- (4) 非常時等の対応
- (5) 具体的な対訳語
- (6) 多言語表記の統一性・連続性の確保
- (7) 多言語対応推進のあり方
- (8) 標識やサインのデザインや設置方法に関する留意点
- (9) 訪日外国人旅行者の利便性や満足度の向上につながる重要な視点

等について細かく解説した上で、多言語対応を推奨している。また、ガイドライン(2014,p.8)では、名称・標識・サイン・情報系の言語景観に対して、基本ルールとしては日本語及び英語の併記を推奨し、「外国人の来訪者数や誘致目標等、施設特性や地域特性の観点から、英語以外の表記の必要性が高い施設」に対しては、「視認性や美観に問題がない限り」、「中国語や韓国語及びその他の必要とされる言語」の表記を行うことが望ましいとしている。

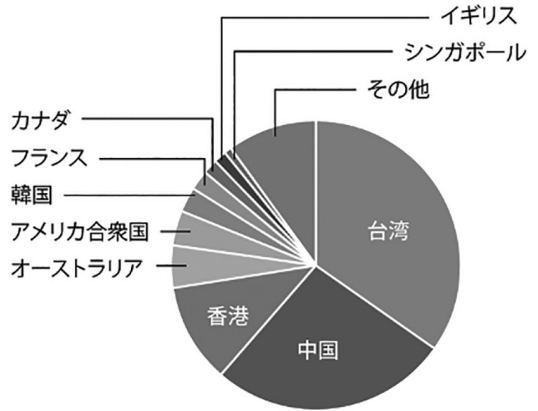
上記のガイドラインを踏まえた上で、「受信者」である訪日外国人観光客の視点から、本研究の調査対象である瀬戸芸における時限的言語景観を考察する。言語景観研究は、看板・標記・サインのみならず、その発信者、発信目的・手段と受信者等も

“多言語対応の対象となる情報”の種類			対象施設		
			基本ルール	外国人の来訪者数や誘致目標等、施設特性や地域特性の観点から、英語以外の表記の必要性が高い施設	専ら地域住民の用に供されている施設等
名称・標識・サイン・情報系	禁止・注意を促す (タイプA)	(例) ・立入禁止、危険 ・禁煙、飲食禁止 ・非常時等の情報提供	日本語 英語	日本語 英語 中国語 韓国語 その他の必要とされる言語	日本語
	名称・案内・誘導・位置を示す (タイプB)	(例) ・駅名表示 ・路線図、停車駅案内 ・施設名称表示 ・駅構内図の表記 ・乗車券・入館券 ・ICカードの使い方	日本語 英語	日本語 英語 中国語 韓国語 その他の必要とされる言語	日本語
解説系	展示物等の理解のために文章で解説をしている (タイプC)	(例) ・展示物の作品解説 ・展示テーマの解説 ・展示会全体の解説	日本語 英語	日本語 英語 中国語 韓国語 その他の必要とされる言語	日本語

■：併記を行うことを基本とする
 ■：視認性や美観に問題がない限り、表記を行うことが望ましい

図8 多言語対応を行う対象・範囲及びその考え方 (観光庁、2014、p.8)

順位	国/地域名	回答数	割合(前回順位)
1	台湾	561	34.9% (1)
2	中国	428	26.7% (3)
3	香港	177	11.0% (2)
4	オーストラリア	75	4.7% (6)
5	アメリカ合衆国	65	4.0% (5)
6	韓国	45	2.8% (8)
7	フランス	36	2.2% (4)
8	カナダ	27	1.7% (12)
9	イギリス	19	1.2% (7)
10	シンガポール	16	1.0% (15)
—	その他	157	9.8% (—)
合計		1,606	100.0%



(左から) 表1・図9 瀬戸内国際芸術祭2019の「国外来場者居住地」
(瀬戸内国際芸術祭実行委員会、2020、p.5)

研究対象としており(有元 2012)、瀬戸芸は日本国内でも知名度の高い国際芸術祭として、世界各国・各地から参加者を集めている。「瀬戸内国際芸術祭2019総括報告」(2020、p.45)によれば、瀬戸芸への国外来場者を国/地域別に集計すると、台湾、中国、香港、オーストラリア、アメリカ合衆国、韓国、フランス、カナダ、イギリスとシンガポールからの来場者が上位になる(図9)。観光庁が示したガイドラインに沿った対応としては、日本語・英語・中国語・韓国語による多言語対応を行うことが「視認性や美観に問題がない限り」望ましいと考えられる。ガイドライン上、さらに検討の余地があるとすれば、国/地域別の順位で第7位となるフランスおよび第8位となるカナダの一部における公用語であるフランス語の併記対応になるだろう。

実際に瀬戸芸の開催エリアは2019年まで訪日外国人の訪問者が芸術祭の会期外も含めて増加傾向にあったため、交通結節点の常設的な言語景観には、図10の例にあるように、日本語・英語・中国語・韓国語の4言語で表記されたものが見られる。一方で、瀬戸芸のために設置された時限的な言

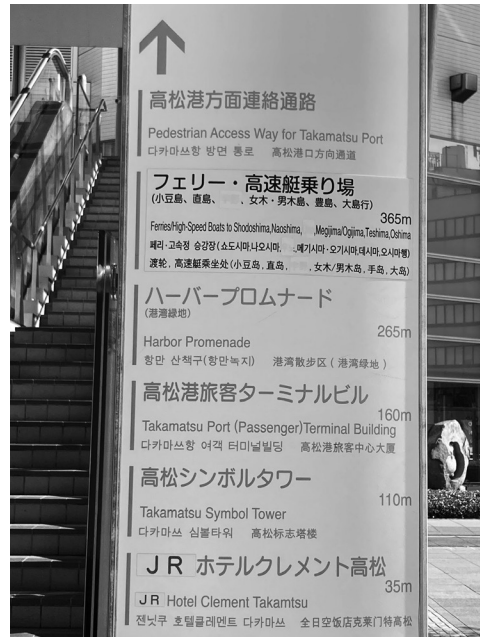


図10 瀬戸芸開催エリアにおける常設的な言語景観の例 (JR高松駅周辺) (撮影者: 姚)

語景観については、図2~4に例示されるように、原則として日本語と英語の2言語で表記されているが、中国語・韓国語・フランス語といった言語が表記された誘導サインは本調査中に発見されなかった。これは、主催者側の注意が言語景観の顕著化という機能に向けられたものではないかと推測される。山川・藤井(2019, p.25)は、言語景観における多言語表示の言語選択の問題について、「複雑な表示になると見づらくなり、それだけで伝達性が低下する」「地域の景観を損ねることになれば、かえって観光地の評価を下げる」等として、利便性が高いからと言語を増やせばいいというものではないと指摘している。過度に具体的かつ詳細な言語情報を一度に提供することは、受信者にストレスを与える可能性もあるため、言語景観のデザインにあたっては、受信者が情報を受け取るタイミングについて具体的に想定し、状況を見極めながら多言語対応計画を進める必要があると考えられる。

4.2 芸術祭における「位置サイン」の例

芸術祭における特徴的な時限的「位置サイン」と

して、芸術作品を展示する会場の場所を示す言語景観がある。公式作品の展示会場はすべて「os03」(図11)や「D-312」(図12)といった具合に、アルファベットと数字の組み合わせで記号化され、都市交通の駅ナンバリングのように付番されている。このように言語景観を整備し、配布または販売する地図等における案内とも情報を連動させることによって、開催エリア内全域に点在する会場情報を国内外の観光客へ簡潔に伝えている。

このように物理的に離れた多拠点の会場間で统一的にディレクションされた言語景観は、芸術祭参加者に与える安心感を継続的にもたらす効果があると考えられる。これらは瀬戸内国際芸術祭、北アルプス国際芸術祭等の北川フラム氏がディレクターを務める芸術祭に共通する特徴的な言語景観であり、配置される時限的なサインに一定の類似性が見られることから、芸術祭の運営のノウハウやフィードバックが何らかの形で相互に継承され、現在の形に至ったのだと推察される。

もう一つ、主要な位置サインの例を挙げると、トイレに関する言語景観がある。トイレに関する時限

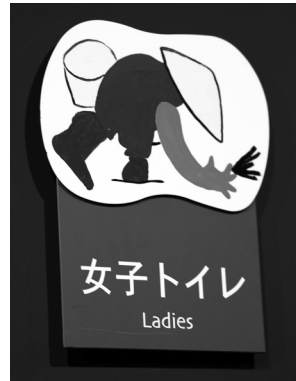


(左から) 図11 瀬戸芸の時限的な案内サインの例



図12 大地の芸術祭の時限的な案内サインの例

(撮影者：図11は姚、図12は野津)



(左から) 図13 瀬戸芸のトイレ位置サインの例 図14・図15 大地の芸術祭のトイレ位置サインの例
 (撮影者: 図13は姚、図14および図15は河村)

的な「誘導サイン」については、既に図2を例に挙げた。しかし、トイレに関する時限的な「位置サイン」は発見することができなかった。観光客がトイレへ向かう経路は芸術祭特有になり得るが、トイレそのものは仮設で追加しない限りは芸術祭であっても常設のトイレを使用することが一般的だからだと考えられる。但し、「芸術祭の」トイレに関する位置サインとしては、会場によっては特筆すべき言語景観も見られた。図13の言語景観は瀬戸芸の会場トイレにおいて見られたもので、大きなピクトグラムに補足事項が多言語で追加された、前述の観光庁ガイドラインに沿った言語景観となっている。一方、図14・図15の言語景観は大地の芸術祭の会場トイレにおいて見られたもので、芸術祭の言語景観について考える上で示唆的なため、考察について5章で詳述する。

4.3 芸術祭における「規制サイン」の例

芸術祭の会場において、参加者の行動を規制または禁止する必要がある場合には、時限的な「規制サイン」が用いられる。前述の時限的な言語景観と同様、大地の芸術祭ではシンボルカラーの黄色が基調(図16)、瀬戸芸ではシンボルカラーの青色が

基調となっている(図17)。瀬戸芸の方は、青色の看板ながら禁止事項を伝達していることを強調するためか、中心の目立つところに赤いピクトグラムが据えられている。

多言語対応についても前述の時限的な誘導サインの事例と同様に、瀬戸芸では英語が併記されている(図17)一方で、大地の芸術祭における規制サインは、自動車を運転する観光客が道を間違えないよう注意喚起する説明が日本語のみであり(図16)、「×」というサインが規制や禁止を示すことも必ずしもユニバーサルな慣習とはいえないため、日本語や日本文化を理解しない受信者にとっては何を伝えたいのかわからない看板になっている。訪日外国人観光客にとっては、なんらかのメッセージを受け取っているにもかかわらず内容がわからないため、ストレスになる。自動車を運転していない訪日外国人観光客が見ても、自分がこの看板の伝達内容の対象外であると理解すること自体が難しいだろう。このような場合、視認性や美観を多少損ねても多言語対応が必要だと考えられる。

瀬戸芸においては、会場付近の常設的な言語景観では多言語対応されているものがある。その一例が図18であるが、これらの伝達内容については多



(左から) 図 16 大地の芸術祭の時限的な規制サインの例 図 17 瀬戸芸の時限的な規制サインの例
(撮影者：図 16は野津、図 17は姚)



図 18 瀬戸芸の会場周辺で見られた常設的な多言語規制サインの例 (撮影者：姚)

表 2 図 18 の言語景観に表示された多言語表現とその日本語への直訳

言語表示	言語	日本語への直訳	文の性質
公園内での宿泊はご遠慮下さい。	日本語	—	依頼表現
No camping in the park.	英語	公園内でのキャンプ禁止	禁止表現
禁止露營	中国語	野営を禁止する	禁止表現
캠핑금지	韓国語	キャンプ禁止	禁止表現
ごみは各自、お持ち帰り下さい。	日本語	—	依頼表現
Please take your trash with you.	英語	ごみを持ち運んでください。	依頼表現
请不要扔垃圾	中国語	ごみを捨てないでください。	否定の依頼表現
쓰레기를 버리지 마세요	韓国語	ごみを捨てないでください。	否定の依頼表現

言語での翻訳結果にも注意を向ける必要がある。

表2は、図18に表示された多言語表記をすべて日本語に直訳して一覧にしたものである。この表からは、同じ内容を伝えたいはずの言語景観であっても、多言語翻訳の過程で細かなニュアンスが少しずつ変わってしまうことが読み取れる。この例ではいずれも、日本語、英語、中国語ないし韓国語の順で、文章の受信者に対する丁寧さを感じやすい表現となっている。同じ規制または禁止事項でも、伝え方によって受信者が受け取るメッセージは異なる。多言語表記を選択する際には、言語間でニュアンスの違いが出て、特定の言語においてのみより否定的な表現に感じられることがないように、機械を用いた直訳に頼るのみではなく、専門家の監修を交えて丁寧に翻訳することが望ましい。

4.4 芸術祭における「案内サイン」の例

2つの芸術祭に観光客として参与観察して収集した言語景観を4種の公共サインに分類していく中で、乗降条件や位置関係を案内するための時限的な「案内サイン」はもっとも発見が難しく、事例が集まりにくかった。図19・図20は大地の芸術祭で発見した2例である。

図19は自動車や自転車を運転して会場エリア内を周遊する観光客に向けて、道路形状を案内し注意喚起するサインである。図20は、公共交通機関と徒歩を組み合わせ会場エリア内を周遊する観

光客に向けた無料送迎システムの存在を案内するためのサインである。図20・図21ともに多言語対応していないため、日本語話者以外に案内の内容が伝わりにくい問題があるのに加えて、図20は日本語の「シャトルバス」が読めても、誰がどこへ向かう際に利用できる交通機関なのかがわからないという問題もある。大地の芸術祭の主要な玄関口の一つとなる北越急行ほくほく線まつだい駅からは、会期に合わせて無料周遊シャトルバスが運行され、駅から離れた芸術作品の鑑賞を助けていた。そのことが一目で伝わる言語景観になっていれば、より多くの観光客がためらわずに利用できる交通機関になると考えられる。

また、観光客として現地を周遊する中で、複数の開催エリア間の位置関係を示す時限的な言語景観は発見することができず、次のエリアを併せて周遊するためにはどのような交通機関でどの程度の時間を掛ければ良いのかが直感的にわからなかった。そのような疑問に答えることのできる時限的な言語景観があれば、観光客の複数エリア周遊をより喚起できる可能性もある。

4.5 芸術祭における「その他の言語景観」の例

本項では、言語景観内の情報に交通案内の要素が無く、前述の4分類のいずれにも当てはまらないものを「その他の言語景観」に分類する。芸術祭における時限的な「その他の言語景観」で代表的なも



図19 大地の芸術祭における時限的な案内サイン



図20 大地の芸術祭の時限的な交通機関に貼られたサイン

(撮影者：図19・図20ともに野津)

のは、芸術作品の内容を解説するサインである。

以下に例示する図21・図22は、瀬戸芸の会場の一つである大島において過去に行われたハンセン病患者の隔離政策をテーマとした芸術作品の核となるメッセージが多言語表示された例である。建物の襖に直接描かれた文からは、日本語話者はこの場所で暮らしたハンセン病患者からの強いメッセージを受け取ることができるが、日本語の識字を前提とした作品のため、多くの訪日外国人観光客にも作品のメッセージが伝わるよう、英語と中国語による翻訳文が作品の下に掲げられている。このような複雑かつ作品を理解する上で重要な文章は、より多くの言語で実際に訪れる外国人観光客にも内容を伝えられるような工夫が効果的と考えられる。繊細なメッセージを伝えるために、機械による自動翻訳のみに頼らずに、両言語の文化背景を理解する者によって丁寧に翻訳されることが望ましい。

5 言語景観の再分類

—マズローの五段階欲求説との対応

第4章で分析したように、広域の多拠点で作品展示やパフォーマンスが行われる地方開催型の芸術祭において時限的に掲示される言語景観は、国土交通省の公共サインの分類を援用することで、5つのカテゴリに分けることができた。その上で、芸術文化観光を推進するという観点から第4章の分類を見直した際に興味深いのは、前述(図13~図15)

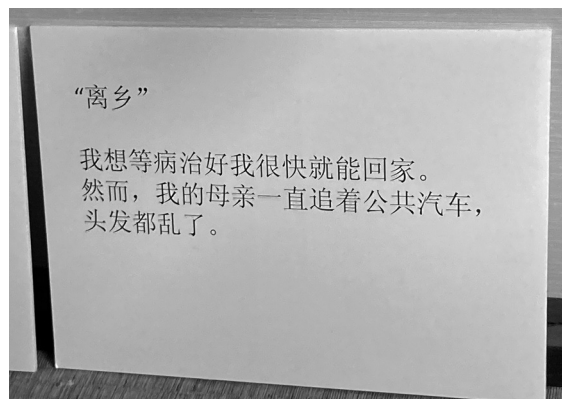
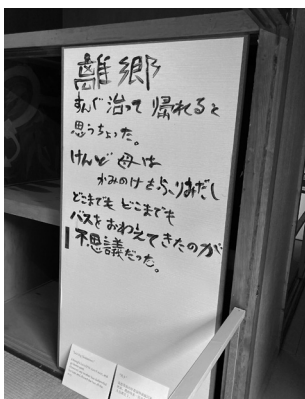
のトイレの位置サインの事例である。図13と、図14・図15の位置サインは、いずれもトイレの位置を指し示す言語景観であるにも関わらず、なぜ読み取れるメッセージが異なるように感じられるのだろうか。

その説明を試みるべく、本研究では言語景観の新たな分類方法として、芸術祭に参加する観光客の行動欲求と、その欲求に応答する言語景観をマズローの欲求五段階説(Maslow, 1970=1987)と関連付けて分類する方法を提案する。

表3は、分類ごとの具体的な言語景観の例をまとめたものである。

一般的な交通サインは、移動する者が派生需要的に交通空間を通行する際に求められる情報の伝達を目的としている。また、受信者の交通空間における言語景観に対する要求水準は、マズローの欲求五段階説に対応させると「生理的欲求」と「安全の欲求」(つまり物質的欲求)が満たされることである。そのため、前述の国土交通省が定義する公共サインは、全4分類のいずれもが移動する者の物質的欲求に対して働きかけるものとなっている。

一方で、多くの観光客が自発的な目的意識を持って移動しながら参加する芸術祭や演劇祭等の芸術文化観光行事においては、言語景観に観光客自身が持つ文化的背景が反映され、観光客が作品の内容を深く理解できることによって「社会的欲求」や「承認欲求」が満たされたり、さらには、観光客が適



(左から順に) 図21・図22 瀬戸芸における芸術作品の核となるメッセージが多言語表示された例

(撮影者：図21・図22ともに姚)

切に提供された情報に誘導されることによって最終的には参加型・体験型のプログラムに辿り着くことで「自己実現欲求」までもが満たされたりすると、その旅行およびその土地への深い満足感を抱いて再訪意思や口コミ拡散意思が高まる可能性がある。

重要なのは、観光客の欲求に対応する言語景観の分類には複数の解釈があり得ることである。前述の大地の芸術祭における言語景観を例に検討すると、図14・図15は大地の芸術祭の主要な開催拠点の一つである「農舞台」内部のトイレを示す位置サインである。これらは、日本語と英語が併記された常設的な言語景観の上から、ほぼ同じ大きさの芸術作品が時限的な言語景観を模して貼り合わされているのが特徴で、図13で示された一般的なトイレのピクトグラムと比較すると、あえて一見してトイレであることが直接的にはわかりにくい、受信者が考えることで何らかの意味やトイレとの関連性も見出せそうなイラストを採用することで、通常は受信者の「生理的欲求」に応える言語景観が、例

えば「トイレという場が本質的には何なのかを立ち止まって考えよう」という場の雰囲気を出している。このような言語景観が対話を生むと、発信者と受信者が互いの文化をより深く理解するきっかけとなって、マズローの五段階欲求説での「承認の欲求」を満たす可能性や、発信者の問い掛けに受信者が応じるという、相互の関係性により作品が完成すると思えることで受信者の「自己実現の欲求」を満たす可能性が生じる。

このように、言語景観は通常、「生理的欲求」「安全の欲求」といった物質的欲求に合理的に対応して情報提供するためのものだと理解されているからこそ、芸術的要素を意図的に加えることで、より高次の精神的欲求を満たせる作品に昇華する可能性があり、芸術にはそのような視座の転換を促す機能がある。

当然、喫緊に使用できるトイレを探す受信者の「生理的欲求」もすみやかに満たす必要があるため、すべての掲示物をわかりにくくすることは適切で

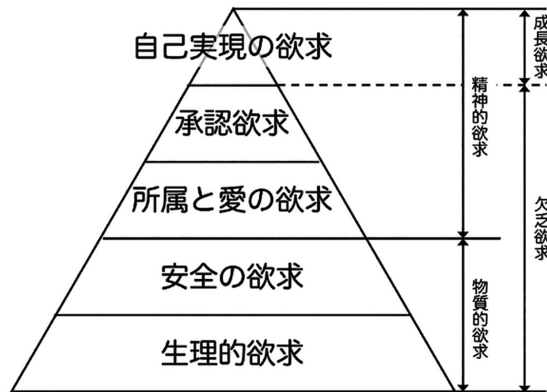


図23 マズローの五段階欲求説 (Maslow (1970=1987) を基に作成)

表3 マズローの五段階欲求説に沿った新たな言語景観の分類 (仮説) (姚・傅・野津作成)

大分類	代表的な小分類の例
10 生理的欲求	11 トイレ、12 飲食、13 喫煙、等
20 安全の欲求	21 交通、22 治安、23 新型コロナ対策、24 宿泊、25 通信、26 介助、等
30 所属と愛の欲求	31 歓迎、32 ホスピタリティ、33 交流、34 共感 (芸術作品も含む)、35 共有、36 マナー、37 言語対応、等
40 承認の欲求	41 尊重、42 丁寧、43 文化理解、等
50 自己実現の欲求	51 参加促進、52 体験促進、等

はない。そのため、図14・図15は芸術作品であるのみならず、本来の意味合いを示す文字情報も含まれた「言語景観」であることが重要である。

6 本研究の課題と今後の展望

本研究では、地方開催型の2つの芸術祭を事例に、その時限的な言語景観の形態を分類し、今後の豊岡演劇祭において適用可能な要素を抽出し、まとめることができた。しかし、本研究で事例として扱った芸術祭と、舞台芸術作品を主に取り扱う演劇祭とは、参加者が行程を選択する上での時間制約の条件が大きく異なることには注意が必要である。美術作品中心の芸術祭では、原則として各参加者が任意の時間に会場へ到達すれば作品を鑑賞できるため、参加者の人流が比較的分散するという特徴がある。一方、演劇祭は各作品の開演時間という時間制約があるため、常に特定の会場に人流が集中する特徴がある。このような差がもたらす、参加者が必要とする言語景観の内容や性質の変化については今後検討する必要がある。

また、美術作品を取り扱う芸術祭と比較した際の演劇祭の特徴として、作品鑑賞の前後の時間に人流が劇場内のロビー等の空間に滞留しやすいたことが挙げられ、その空間で起こる参加者間の対話の存在についても今後注目していく必要がある。異なる文化的あるいは社会的背景を持つ参加者同士が同じ空間に集中するという場の特性を鑑みると、すべての情報を主催者が言語景観として開示するだけでなく、参加者同士あるいは観光客と開催地域の住民との対話による情報交換を促すことが、参加者のマズローの五段階欲求説における「所属と愛の欲求」「承認の欲求」「自己実現欲求」といった高次の精神的欲求を満たすことを目指す上ではより効果的となる可能性がある。

言語景観に否定的な表現を用いないことを目指し、参加者の主体的な行動を後押しするための理論としては、「選択を禁じることも、経済的なインセンティブを大きく変えることもなく、人々の行動を予測可能な形で変える」(Thaler and Sunstein,

2008=2009) ナッジ理論を実装した仕組みを検討することも有効だと考えられるが、本研究内では言語景観とナッジ理論の関連性については十分に検討できなかったため、今後の研究課題としたい。

また、今後の展開としては、本研究で提案した整備手法を豊岡演劇祭2023の言語景観に可能な限り展開し、その効果測定も実施したいと考えている。豊岡演劇祭2023の会期後に、演劇祭会期中に提供されたスマートフォン向け観光アプリを通じて取得した参加者の行動履歴や、参加者へのアンケート調査等を基に、前回の豊岡演劇祭2022と比較して広域の観光周遊行動が増加したか、演劇祭への参加者の満足度が高まったか等を検証し、2024年以降の豊岡演劇祭に向けてさらなる改良を続けていく。

おわりに —多文化社会を見据えた言語景観と持続可能な観光の発展に向けて

地球環境や自然環境が適切に保全され、将来の世代が必要とするものを損なうことなく、現在の世代の要求を満たすような開発が求められる社会へと変容を遂げる中、持続可能な観光の必要性が問われるようになった。国連世界観光機関(以下、UNWTO)は、持続可能な観光を「訪問客、業界、環境および訪問客を受け入れるコミュニティーのニーズに対応しつつ、現在および将来の経済、社会、環境への影響を十分に考慮する観光」と定義しており(観光庁・UNWTO駐日事務所、2020)、UNWTOによれば、持続可能な観光に求められる要素は以下の3点である¹⁾。

- (1) 主要な生態学的過程を維持し、自然遺産や生物多様性の保全を図りつつ、観光開発において鍵となる環境資源を最適な形で活用する。
- (2) 訪問客を受け入れるコミュニティーの社会文化面での真正性を尊重し、コミュニティーの建築文化遺産や生きた文化遺産、さらには伝統的な価値観を守り、異文化理解や異文化に対する寛容性に資する。
- (3) 訪問客を受け入れるコミュニティーが安定し

た雇用、収入獲得の機会、社会サービスを享受できるようにする等、全てのステークホルダーに公平な形で社会経済的な利益を分配し、貧困緩和に貢献しつつ、実行可能かつ長期的な経済運用を実施する。

上記の(2)を踏まえれば、多文化の背景を踏まえた多言語での言語景観の整備は、観光業を持続可能な形で必須の要素と考えることもできる。さらに、それらの言語景観は、(1)を考慮しながらオーバーツーリズムの問題等を回避できるような観光客の動線をデザインし、(3)を実現するべく、観光客のみに資する形での整備に留まらず、観光地周辺で日常的に生活する地域住民も含めた多文化社会の構築に資することが最終的な目標となるのではないか。

異なる文化背景を持つ他者の精神的欲求をも充足し得る言語景観の整備は、他者に土地の風土と歴史を正確に伝えることを通じて、受信者がその土地から存在を承認されたという印象を受け取り、最終的にはその土地での自己実現へと繋げるための情報提供がどのようにあるべきかという問いに答えるための活動とも捉えることができる。本研究では、豊岡演劇祭における時限的な言語景観の改良とその評価を研究目標としたが、その目的は豊岡演劇祭という時限的な文化行事の参加者満足度向上には留まらない。今後は、本研究および継続する研究から得られる知見の蓄積を、開催地域が行事期間外もさまざまなマイノリティを包摂する多文化共生社会として発展していくために必要な価値観と方法論の醸成にも繋げていきたい。

謝辞

本研究は、芸術文化観光専門職大学2022年度芸術文化観光学研究プロジェクト「時限的な言語景観のあり方に関する研究—多文化共生社会における文化イベント案内の最適化—」(研究代表者:姚瑤)の助成を受けたものである。

注

- 1) 持続可能な観光の定義(国連世界観光機関(UNWTO) 駐日事務所公式ホームページ <https://unwto-ap.org/why/tourism-definition/> より引用(最終閲覧 2023年3月12日))

参考文献

- 正井泰夫(1972)『東京の生活地図』時事通信社
 遠山直子、添田昌志、大野隆造(2003)「劇場の周辺環境と鑑賞前後の行動との関係」『日本建築学会大会学術講演梗概集』Vol.E-1, pp.1127-1128
 バックハウス,ペート(2005)「日本の多言語景観」真田真治、庄司博史編『辞典日本の多言語社会』岩波書店, pp.53-66
 金美善(2007)「多言語景観をはじめとする近年の研究について」『社会言語科学会ニューズレター』第24号, pp.2-4
 庄司博史、バックハウス,ペート、クルマス,フロリアン編(2009)『日本の言語景観』三元社
 庄司博史(2009)「多言語化と言語景観——言語景観からなにがみえるか」庄司、バックハウス、クルマス編(2009)
 井上史雄(2009)「経済言語学からみた言語景観——過去と現在」庄司、バックハウス、クルマス編(2009)
 寺尾智史(2009)「地方都市における多言語表示——美濃加茂市における南米出身者向け表示を事例として」『神戸大学留学生センター紀要』15, pp.25-49
 山下暁美(2010)「外国人集住都市の言語景観——言語表示サービスの現状」『明海大学外国語学部論集』22, pp.17-34
 中井精一、ロング,ダニエル編(2011)『世界の言語景観 日本の言語景観——景色の中のことば』桂書房
 有元光彦(2012)「言語景観研究における実験的アプローチの試み」『やまぐち学の構築』8, pp.15-25
 ロング,ダニエル、今村圭介(2012)「伊賀上野の多言語・多方言の言語景観」『日本語研究』32, pp.145-161
 観光庁(2014)「観光立国実現に向けた多言語対応の改善・強化のためのガイドライン」(<https://www.mlit.go.jp/common/001029742.pdf>, 最終閲覧 2023年2月20日)
 斎藤敬太(2015)「ブラジル人集住地域のリンガフランカ——群馬県大泉町と三重県伊賀市の比較」『日本語研究』35, pp.43-57
 斎藤敬太、志喜屋カロリーナ(2015)「中南米系外国人集住地域の言語表示における伝達意図の阻害要因」『日本語研究』35, pp.113-123
 斎藤敬太(2016)「震災後の方言景観にみる福島県会津方言の変容」『日本語研究』36, pp.27-42
 ロング,ダニエル、斎藤敬太(2016)「隣接する無敬語・敬語地帯の言語景観にみられる待遇表現の違い(福島市編)」『人文学報』512-7, pp.75-93

- ロング,ダニエル、斎藤敬太 (2017) 「隣接する無敬語・敬語地帯の言語景観にみられる待遇表現の違い (近畿編)」『人文学報』513-7, pp.33-44
- 本田弘之、岩田一成、倉林秀男 (2017) 「街の公共サインを点検する——外国人にはどう見えるか」大修館書店
- ロング,ダニエル、斎藤敬太 (2018) 「隣接する無敬語・敬語地帯の言語景観にみられる待遇表現の違い (外国人集住地域編)」『人文学報』514-7, pp.11-26
- 李舜炯編 (2019) 『都市空間を編む言語景観』中文出版社
- 磯野英治 (2019) 「日本語教育に活用可能な言語景観と教育実践——理論と方法」李舜炯編 (2019)
- 甲賀真広 (2019) 「短期日本語研修における自発的学習を促す言語景観調査」李舜炯編 (2019)
- ロング,ダニエル (2019) 「日本語学習者を悩ませる言語景観——看板のアクティブラーニング教材化」李舜炯編 (2019)
- 李承珉 (2019) 「日本の観覧施設に見られる言語景観」李舜炯編 (2019)
- 山川和彦編 (2019) 『観光言語を考える』くろしお出版
- 山川和彦・藤井久美子 (2019) 「言語景観とは何か」山川和彦編『観光言語を考える』, pp.13-30
- 橋内武 (2019) 「ビクトグラムと文字情報」山川和彦編『観光言語を考える』, pp.150-151
- 野村実 (2019) 『クルマ社会の地域公共交通—多様なアクターの参画によるモビリティ確保の方策—』晃洋書房
- 瀬戸内国際芸術祭実行委員会 (2020) 「瀬戸内国際芸術祭 2019 総括報告」
(<https://setouchi-artfest.jp/files/about/archive/report2019.pdf>, 最終閲覧 2023 年 2 月 20 日)
- 観光庁・UNWTO 駐日事務所 (2020) 「日本版持続可能な観光ガイドライン」
(<https://www.mlit.go.jp/kankocho/content/001350849.pdf>, 最終閲覧 2023 年 3 月 12 日)
- 渡部友一郎 (2021) 「文化観光拠点施設を中核とした地域における文化観光の推進に関する法律 (文化観光推進法) の実務的考察—ポストコロナ時代のオンライン文化観光整備のためのルール形成—」日本観光研究学会機関誌『観光研究』32-2, pp.95-100
- 切通堅太郎、西藤真一、野村実、野村宗訓 (2021) 『モビリティと地方創生 一次世代の交通ネットワーク形成に向けて—』晃洋書房
- 清水哲夫 (2021) 「新しい観光の価値を創り上げる地域モビリティ」、家田仁・小嶋光信監修『地域モビリティの再構築』薫風社, pp.42-48
- 大地の芸術祭実行委員会 (2022) 「越後妻有 大地の芸術祭 2022」
(<https://www.echigo-tsumari.jp/triennale/y2022/>, 最終閲覧 2023 年 3 月 12 日)
- 兵庫県・豊岡市・養父市・朝来市・香美町・新温泉町 (2022) 「但馬地域公共交通計画」
(https://web.pref.hyogo.lg.jp/ks05/documents/shiryo_2-2-1_20220325.pdf, 最終閲覧 2023 年 3 月 12 日)
- ロング,ダニエル、斎藤敬太 (2022) 『言語景観から考える日本の言語環境』春風社
- 中村文彦、国際交通安全学会、都市の文化的創造的機能を支える公共交通のあり方研究会編 (2022) 『余韻都市：ニューローカルと公共交通』鹿島出版会
- 豊岡演劇祭実行委員会 (2022) 「豊岡演劇祭 2022 事業報告書」
(<https://toyooka-theaterfestival.jp/wp-content/uploads/2022/11/豊岡演劇祭2022事業報告書.pdf>, 最終閲覧 2023 年 3 月 12 日)
- 豊岡市 (2023) 「豊岡市の世帯および人口の推移」
(<https://www.city.toyooka.lg.jp/shisei/tokei/1003134.html>, 最終閲覧 2023 年 3 月 12 日)
- Maslow, A. H. (1970) *Motivation and personality (2nd ed.)* New York: Harper & Row. (小口忠彦訳『人間性の心理学 [改訂新版]』産能大学出版部、1987 年)
- Landry, R. and Bourhis, R. (1997) Linguistic landscape and ethnolinguistic vitality: An empirical study. *Journal of Language and Social Psychology* 16(1): 23-49
- Urry, J. (2007) *Mobilities: Polity* (吉原直樹・伊藤嘉高訳『モビリティーズ——移動の社会学』作品社、2015 年).
- Richard H. Thaler, Cass R. Sunstein (2008) *Nudge: Improving Decisions About Health, Wealth, and Happiness*: Yale University Press (遠藤真美訳『実践行動経済学——健康、富、幸福への聡明な選択』日経BP社、2009 年)